

劔岳登頂記

● (社)日本測量協会会長

村井俊治

はじめに

平成20年2月13日に、新田次郎原作「劔岳〈点の記〉」の映画化に取り組んでいる木村大作監督を協会にお迎えした時は、私は所用で出席できなかった。協会はこの映画の作成を全面的に支援することを決めたので、来年映画ができる前に、会長と副会長は是非劔岳に登ろうではないかと、星埜副会長と話し合った。4月には、関西支所の山田明さんにガイド役をお願いした。山田さんは、劔岳に7回も登頂した山のベテランである。三角点の標石を頂上に設置した時の担当者でもある。北大山岳部出身の平田更一さんにもガイドをお願いした。星埜さんは劔岳について研究を始めていろいろコースやその難易度を調べて教えてくれた。私は、呑気で、行けば何とかかなると思い、さして真剣には調査をしなかった。柴崎芳太郎測量官が、101年前の明治40年7月28日に登頂したとされる同じ日に劔岳の山頂に立とうではないかと計画が作成された。当初は早月尾根から登る案が立てられたが、雪が多く残っていることなどから、劔沢小屋経由で登山をするコースに変更された。

1. 室堂に集結したメンバー

平成20年7月27日午前10時半、室堂バスターミナルに登山を目指すメンバーが顔を合わせた。なんと14名もいる。初めての顔もいるので、自己紹介をしてから10時40分に出発をした。このうち4名は、登山をしなかった。したがって劔岳登山のメンバーは、次の10名となった。1) 村井俊治、日本測量協会会長、2) 星埜由尚、同副会長、3) 山田明、同関西支所(リーダー)、4) 平田更一、同GIS研究所(サブリー

ダー)、5) 中村秀至、三菱総合研究所(元村井研究室学生)、6) 松本恭子(平田さん友人)、7) 鈴木正徳、共同通信社(平田さん友人)、8) 片岡理智(元山岳会会員で平田さんの友人)、9) 片岡優理(理智さんの娘で15歳)、10) John Maurice WILLIS(アメリカ人で片岡理智さんの夫)。劔沢小屋で、国土地理院の近畿地方測量部 測量課の森田和幸と濱田加奈子、協会関西支所 測量技術センターの上田重彦の大阪組3人が劔沢小屋で落ち合うことになっていた。私は最年長の68歳で一番心配された。

2. 劔御前経由の

劔沢小屋までの登山

室堂(標高2,432m)を出た後は、地獄谷へ降り、雷鳥沢キャンプ地(標高2,277m)を経ていよいよ劔御前の峠に向けてガレ場を登り始めた。少し登ったところの11:30に、山田リーダーは昼食の弁当を食べよう指示。雷鳥沢に張った色とりどりのテントと背景の北アルプスの雪渓が美しい。雄山などの立山連峰が一望できる。30分休んでから本格的な登り。1時間ほどのところで雨が降ってきたので、雨具を着ける。13:10に劔御前小屋(標高2,755m)に到着した時は、風雨で登山客が小屋に押しかけ、身動きできず。仕方なく雨の中を、下って14:00に劔沢小屋(標高2,530m)に到着。ここに宿泊予定なので、部屋割りの後、ぬれた雨具や靴を乾燥室に干す。15:10に突然暴風雨となり、台風のような荒れ模様。ダウンバーストと呼ばれる強風だ。黄色のテント一つが強風で飛んでいくのが見えた。部屋の中にも、ヒューヒューやらバタバタなどの音が鳴り、尋常



光の劔岳（劔沢小屋から 筆者撮影）

な天候ではない。大阪組3人が本来なら先に到着していなければならないのに、着いていなかったのが山田リーダーは、心配して無線で他の山小屋に連絡するもうまく連絡がつかない。16:25、ビショヌレになって、3人組が到着。大阪を夜行バスで室堂に来て、雄山、大汝山、富士の折立、真砂岳、別山を縦走してきたが、最後に道に迷ったとのことだった。17:10になんと風雨がやみ、太陽が出た。山の天気はわからない。早速目の前に見える劔岳の写真撮影する。なんと尖った山なのだろう。登れる自信など失せて恐ろし

さを感じる。17:45に夕食を済ませ、明日からの登頂の準備を始めたところが、天気は再び暴風雨に変貌した。一晩中荒れた天気だった。私は19:30には、寝てしまった。山小屋の8畳間に8つのフトンで8人が寝た。女性も一緒だ。夜の9時には消灯で電気は切られる。

3. 8月28日は待機

朝の4時に起床で、5時に朝食、6時に出発の指令。しかし、外は強風雨の上にガスが出て視界なしの状態。天候の回復を待つも回復の兆しがなく、7:

30山田リーダーはこの日の登山を断念。明日に運を恃むことにする。ここで一首。

劔岳 登らんとするも 暴風雨
明日の天気を 仏に祈る

大阪3人組は、仕方なく、劔岳登頂を断念して帰阪することに決定。山田リーダーと私は強風の中、3人を劔御前までの登り道を見送りした。明日に備えてのトレーニングの積りと、せっかく大阪から来て劔岳に登れなかった3人を慰めたいと思ったからだ。9:00に劔御前の小屋の前で3人と握手して別れた。劔沢小屋に戻ると、山田リー

ダーは明日のために、登山口となる剣山荘（標高2,470m）までのやや下り道を偵察に行くという。濃霧の場合、暗い時間では、ベテランでも迷うことがあるのだ。途中で大きな雪渓があり、横切る地点を確かめたい。11:00に昼食を済ませ、11:50に強風の中、山田リーダーを先頭に8人が剣山荘まで偵察に行く。雪渓は強風で足が取られそうだった。ここで一首。

一歩一歩 足場探して 雪渓の
ストック持つ手に 風吹き荒ぶ

30分で剣山荘に到着。風は強いが視界は良い方である。しかし、ガスが出て暗ければたどり着く自信はない。

結局この日の午後はゴロゴロしていた。17:00に夕食をしていた時、太陽が出た。剣岳にはガスが立ち込めて頂上は見えないが、剣御前の小屋は見えるではないか。山田リーダーは、明日は3時起床で、4時に出発すると発表。各人準備をして、早々と就寝した。私は18:30には就寝したが、途中で目が覚め、天候が心配でその後はよく眠れず。風の音も雨の音も聞こえず、何とかなるだろうと考えたりしていた。

4. 剣岳登頂成功

7月29日、朝の3時に起床。山小屋の電気はないから、山用のヘッドランプで支度をして、暗い中を弁当の朝食をとる。突然ザーッと雨の音あり、暗然とする。山田リーダーは、「山の天気はわからない、もう少し様子を見よう」と外の天気を見に行く。ガスが出ていて視界はほとんどゼロ。これでは出発できない。出発の支度をしながら4:15まで待ったところ、視界が10mくらいになり、ゴーサインが出た。

暗い中、全員がヘッドランプを点け



て剣山荘を目指す。ガスはあるが幸い雨はない。私は山田リーダーの後で2番手。星埜さんは私の後で3番手。ジョンが最後から2番目。一番後ろが平田サブリーダー。昨日リハーサルした道を山田リーダーが用心しながら進む。雪渓を横切る時は、山田リーダーの後を必死に付いていく。40分かけて剣山荘に着く。少し休んで5:00ジャストに登りの山道に入った。もうヘッドランプは要らない。14分で最初の鎖場に遭遇。鎖はぬれていて思わず力が入る。山全体で13の鎖場がある。5:26に一服剣（標高2,618m）に到達。第一難関通過である。山道はいよいよ険しくなっていく。10m以上もある大きな四角い岩が今にも落ちそうになっている間を通り抜け、さらに急勾配をへばりつくようにして歩く。とにかく山田リーダーの足の置き所と同じ場所を付いていく。足の運びは同じでも内容は違う。山田リーダーはほとんど手を使わないが、私は両手を使って四つ這いである。下りる時は腰をつけて手で体を支えて、イザリ降りになる。ひょっ

と見ると高山植物の花が私を見ている。ここで一首。

岩山や 四つ這い登り イザリ降り
岩に生えてる 花が微笑む

6:20に前剣の頂上（標高2,813m）に到着。せっかく登ったのに、急勾配を下って、平蔵の頭を通り、7:35に平蔵の科尔（やせ尾根の峠の意味）に到達。尾根は1mの幅しかなく、両側は垂直に見える絶壁の谷で、風が舞い上がって吹き付ける。足をすくわれそうになり、思わず腰をかかめる。ガスがあるので深い谷の底は見えない。

いよいよ最大の難関であるカニのタテバイである。ほとんど垂直の岩壁を、鎖を頼りに山田リーダーの取った足跡を追随していく。山田リーダーの前を登っている中高年の女性が足の踏み場を見失って、右足を上にいせなくなってしまう。山田リーダーが手を女性の足に添えてあげても動けない。しがみついているので自分の足が見えないのだ。何とか一歩が動くまで5分もかかった。長く感じたが15分でカニのタテバイを通過。7:52だった。ここで一首。

鎖場の カニのタテバイ しがみつ 登りつめたる 魔の劔岳

ここを過ぎればもう頂上はすぐだ、との声に、のろのろ急坂を歩く。中学生の優理ちゃんがお母さんに「頂上はまだなの？」と透る声で聞いている。見えるようで頂上はまだ遠い。早月尾根との合流地点の標識があり、もうすぐとの声が上がります。8:26遂に頂上(標高2,999m)に到着。星埜さんと先ず三角点の標石(標高2,997.1m)に直行する。頂上の標識から数メートルのところに、薄茶色の標石があった。ぬれていて、星埜さんとがっしり握手。三角点を前にして二人で写真を撮ってもらいます。山田、平田両氏を加えて協会職員4人の写真も撮る。あたりはガスで何も見えない。景色などどうでもよい。頂上に到達できた達成感が嬉しい。こみ上げる感激。三角点を前にしたら、しかし待てよ、と思った。山登りは頂上に立つのが最終目的だが、測量は頂上に立つのは始まりに過ぎない。霧が晴れて周囲の三角点と測量しなければならないのだ。昔なら晴れるまで何日も頂上で待たなければならない。今はGPS測量だから、天気と視通は関係ないとは言え、少なくとも2、3時間は頂上にいなければならない。そこで一首。

霧の中 劔の岳の 三角点 測量マンの 誇りを刻む

10人全員そろったところで、標高2999mの標識のある山頂で記念撮影。風が強い。あまり時間をかけられない。20分程度で下山開始。下りの最大の難所であるカニのヨコバイに9:02に着く。一方通行になっていて、往きはタテバイ、帰りはヨコバイである。鎖を頼りに岩壁を横方向に移動する。私はタテバイより怖かった。最後は垂直の

梯子があった。山田リーダーが、梯子の下り方を教授。9:22一段一段声をかけながらやっと降りる。26段だった。わずか20分なのに、1時間くらいに感じた。ここで一首。

登頂の 嬉しき奪う 絶壁の カニのヨコバイ 手足の震え

9:47に最後の鎖場を通過し、10:09に休止して、チョコレートなどの食べ物をとる。11:17に一服劔を経て、11:45に劔山荘に到着。そして12:22に劔沢小屋に戻った。4:15に出発してから約8時間である。預けた荷物をザックに入れて、室堂まで帰らなければならない。平田、中村、鈴木、松本の4人は夕方までに富山に着かなければならないので、別れの挨拶をして先に出発。12:45に星埜さん、山田リーダーと私の3人は、劔御前に向かって登り道を歩き出す。私の体力と精神力は限界に来ていた。ちょっと登り勾配を歩いただけで足がだるく、息がゼーゼー。山田リーダーが親切にも時々止まってくれる。私の後ろの星埜さんも同じく牛歩。ここで苦し紛れの一首。

目の上の 劔御前は いと遠し 往きに比べて 帰りの辛さ

1時間もかかって13:40に劔御前の小屋に到着。ここで私はお腹がグルグルとなり、トイレに駆けつけた。後から出たジョン一家は我々に追いつき、先に山を下って行った。3人は、10分の休憩の後、雷鳥沢までガレ場をひたすら下る。良くぞこんな急坂を登ったものだと思う。北アルプスの山並みと雪渓が美しい。15:15雷鳥沢のキャンプ場に到着。後は、室堂まで階段の登りである。足が重く辛い。息も激しくなり、20数えては一休止の状態。山田リーダーが私と星埜さんの歩きを見ながら立ち止

まってくれる。地獄谷を通る近道はガス噴出のため通行禁止。大きく尾根線を迂回しなければならない。疲れた体にはショックであった。ここで一首。

仰ぎ見る 北アルプスの 大雪渓 室堂目指す 足の重さよ

時計を見たら16:06であった。室堂は見える位置。私は16:30の最終の扇沢行きトロリーに間に合うように、一人だけ急いで室堂バスターミナルに向かった。16:20にゼーゼー言いながらバスターミナルに到着。12時間の難行はこれで終了。無事最終のトロリーに間に合い、ロープウェイに乗り黒部ダム経由で17:50扇沢に着いたのだった。

おわりに

劔岳は日本で一番難しい山と言われる。登る体力と精神があるだけでは登頂は達成できない。天候の運がなければ登山を取行できないのだ。その後、悪天候のため劔岳登頂を諦めたという人に何人にも会った。我々は幸運だった。登頂した事実が、満足感で充足される。扇沢からバスに乗り、大町温泉郷で降り、予約なしで「黒部ビューホテル」に宿泊させてもらい、温泉で体を休めた。岩場で作った脛の切り傷が沁みだ。この日7月29日、次男の嫁が女の子を出産した知らせを受けた。二重の喜びで疲れも痛みも飛んだ。これで来年封切られる映画を身近に感じて見られることだろう。今まで一度も短歌を作ったことなどなかったが、劔岳は野暮な私にも詩情を授けてくれたのであった。それにしても改めて測量の大変さとそれを実行した測量官の偉大な仕事に敬服の念を感じた。新田次郎の本を読んだときも感激したが、現地に行ったらさらに2倍感激した。🌀